

問1 弥生時代の文化を象徴する遺物である「銅鐸」について、その使用目的や出土傾向を正しく説明しているものはどれか。（2024年 京都公立入試 類似）

- 豊作を祈るための祭りの道具として用いられ、滋賀県や和歌山県を含む近畿地方で多くの出土が確認されている。
- 実際の戦いや狩猟で使用するための実戦的な武器として、東日本を中心に広く普及した。
- 縄文時代から続く伝統的な風習において、死者を埋葬する際に手足に装着する装身具として使われた。
- 最新の農耕技術を伝えるための道具として、兵庫県や島根県などの沿岸部のみで限定的に使用された。

問2 3世紀頃の日本（倭）の様子について記された中国の歴史書『魏志』倭人伝には、「長年、国々が争い合って混乱していたため、人々は一人の女子を王に立てた」という趣旨の記述があります。このとき、邪馬台国の女王として擁立された人物は誰ですか。（2020年 秋田県公立入試 類似）

- 卑弥呼
- 耆与
- 推古天皇
- 持統天皇

問3 卑弥呼が中国の魏に使いを送り、「親魏倭王」の称号や金印、銅鏡などを授かった背景として、最も適切な説明を選びなさい。（2017年 長崎県公立入試 類似）

- 中国の皇帝から統治者としての権威を認められることで、国内の諸勢力との争いを有利に進め、統治を安定させようとしたため。
- 中国から仏教を公式に導入し、宗教の力を用いて人々の思想を統一し、中央集権的な国家を築こうとしたため。
- 魏の軍力を借りて朝鮮半島の国々を征服し、鉄資源を独占して経済的な優位性を確立しようとしたため。
- 中国の律令制度を日本に持ち帰り、戸籍の作成や租・庸・調の税制を整えるための助言を求めたため。

問4 縄文時代末期から弥生時代にかけて、大陸から伝わった稲作がいち早く開始されたと考えられている、現在の福岡県や佐賀県を含む地域はどこですか。（2016年 奈良公立入試 類似）

- 北九州
- 近畿
- 関東
- 東北

問5 日本の弥生時代中期には、現在の千葉県茂原市に位置する宮ノ台遺跡から出土した「宮ノ台式土器」に代表されるような地域独自の文化が見られました。この日本の弥生時代中期と同じ頃、地中海周辺を中心とする世界ではどのような歴史的な動きがありましたか。（2023年 千葉県公立入試 類似）

- ローマが領土を拡大し、地中海一帯を支配するローマ帝国となった。
- エジプトで巨大なピラミッドが建設され、王の強大な権力が示されていた。
- 中国で殷（商）が成立し、祭祀に用いるための精巧な青銅器が作られていた。
- メソポタミアでハンムラビ王が法典を整え、周辺地域を統一した。

問6 3世紀の中国の歴史書である『魏志倭人伝』には、当時の日本（倭）の様子が記されています。それによると、倭ではもともと男子を王としていましたが、国が乱れて互いに攻め合う状態が数年続きました。この混乱を収めるためにとられた歴史的な経緯として正しいものはどれですか。（2020年 徳島公立入試 類似）

- 一人の女性を王として共立し、国をまとめさせた
- 中国の魏から派遣された総督が直接統治を行った
- 狗奴国の王が武力によって全ての小国を制圧した
- 仏教を国教として導入し、人々の信仰によって乱れを鎮めた

問7 3世紀の中国の歴史書『魏志』倭人伝において、女王卑弥呼が統治していたとされる、当時の日本列島の呼称として適切なものはどれですか。（2017年 長崎県公立入試 類似）

- 倭国
- 邪馬台国
- 日本
- 高天原

問8 弥生時代には青銅器と鉄器がほぼ同時に日本列島へ伝わりました。それぞれの金属器が果たした役割の違いについて説明したものとして、最も適切なものはどれですか。（2020年 沖縄公立入試 類似）

- 鉄器は鋭さや硬さを活かして農具や武器などの実用に供され、青銅器は主に祭りの道具として使われた
- 青銅器は加工のしやすさを活かして農具や工具として普及し、鉄器は主に祭りの道具として使われた
- 鉄器は定期市での取引を円滑にするために使われ、青銅器はイスラム教の礼拝の道具として使われた
- 青銅器は前方後円墳に埋葬するための副葬品として作られ、鉄器は神社の建築のために使われた

問9 中国の歴史書とそこに記された倭（日本）に関する記述の組み合わせについて、記述内容から判断して「魏志」倭人伝の説明として最も適切なものを選びなさい。（2024年 沖縄公立入試 類似）

- 倭人が100余りの国に分かれ、朝鮮半島の楽浪郡に定期的に使者を送っていたとする記述
- 倭の奴国の王が後漢の皇帝から金印を授かり、のちに倭国全体で大きな乱れが起きたとする記述
- 邪馬台国の卑弥呼が使いを送り、死後に大きな塚が作られて100人余りの人々が殉葬されたとする記述
- 倭王が中国の皇帝に対し、自らを「日出づる処の天子」と称する国書を送ったとする記述

問10 弥生時代の生活の様子を描いた資料には、人々が稲の収穫作業を行い、その背景に柱の高い建築物が建てられている様子が見られます。収穫したコメを湿気や害獣から守るために、床を高くし「ネズミ返し」と呼ばれる板を柱に取り付けるなどの工夫を施したこの建築物の名称を答えなさい。（2023年 神奈川県公立入試 類似）

- 高床倉庫
- たて穴住居
- 貝塚
- 環壕集落

問11 弥生時代に大陸から稲作とともに伝わった青銅器のうち、表面に幾何学模様や当時の生活・自然の様子が描かれ、釣鐘のような独特の形状をしている道具の主な用途として最も適切なものを選びなさい。（2023年 三重公立入試 類似）

- 豊作などを祈るための祭りの道具
- 土を耕し田植えをするための農業用の道具
- 食料を保存し煮炊きをするための道具
- 獲物を捕らえたり身を守ったりするための狩りの道具

問12 3世紀前半の倭（日本）について記した中国の歴史書である「魏志倭人伝」には、多くの小国を従えた強力な勢力の存在が記されています。この勢力の名称と、周辺の小国を連合させて治めていたとされる女王の組み合わせとして正しいものはどれですか。（2026年 大阪公立入試 類似）

- 邪馬台国 — 卑弥呼
- 奴国 — 卑弥呼
- 邪馬台国 — 推古天皇
- 奴国 — 持統天皇

問13 弥生時代の高床（式）倉庫において、柱と床が接する部分に「ネズミ返し」と呼ばれる板状の部材が取り付けられた理由として、当時の社会背景を踏まえた説明はどれですか。（2021年 佐賀公立入試 類似）

- 稲作の開始によって収穫した食料を蓄えるようになったため、その貯蔵分を害獣から保護する必要があったから。
- 大陸から新たな建築技術が伝来し、建物の耐震性を高めて大規模な集落の崩壊を防ぐ必要があったから。
- 定住生活が始まったことで、家畜として飼育し始めた動物が建物内に入り込むのを防ぐ必要があったから。
- 集落間の争いが激しくなったため、床下に敵が潜り込んで火を放つことを防ぐ防御壁が必要だったから。

答え合わせ・解説

問1	答え 1 豊作を祈るための祭りの道具として用いられ、滋賀県や和歌山県を含む近畿地方で多くの出土が確認されている。	青銅器はもともと大陸では武器や工具として使われていたが、日本に伝わると祭祀用の道具（祭器）として大型化・薄肉化した。銅鐸はその代表例であり、出土数の統計においても兵庫県、島根県、徳島県に次いで、滋賀県や和歌山県といった近畿圏で多く見つかったことが特徴である。
問2	答え 1 卑弥呼	弥生時代後期、倭（日本）では小国同士の激しい抗争が続いていました。この乱れを収めるために、約30の国々の連合体である邪馬台国の女王として立てられたのが卑弥呼です。彼女はまじないなどの宗教的な力を背景に政治を行い、混乱していた国内をまとめ上げました。
問3	答え 1 中国の皇帝から統治者としての権威を認められることで、国内の諸勢力との争いを有利に進め、統治を安定させようとしたため。	弥生時代後期の倭国は、多くの小国が乱立し争い合う「倭国大乱」と呼ばれる時代を経て、卑弥呼を女王として共立することで一時的な平和を得ていました。卑弥呼は、当時中国で最も勢力の強かった魏と外交を結ぶことで、その強大な威光を背景に国内の統治をより確固たるものにしようとする外交戦略をとりました。
問4	答え 1 北九州	朝鮮半島などの大陸に近い地理的条件を備えていた北九州は、新しい技術や文化の玄関口となりました。縄文時代末期には既にこの地域で水田稲作が行われていたことを示す遺跡が見つかり、ここから日本列島の各地へと農耕文化が広がっていきました。
問5	答え 1 ローマが領土を拡大し、地中海一帯を支配するローマ帝国となった。	弥生時代中期の日本は、紀元前後を中心とした時期にあたります。この時代、地中海世界では都市国家から発展したローマが周辺諸国を征服し、広大な領土を持つローマ帝国として全盛期を迎えようとしていました。一方で、選択肢にあるエジプトのピラミッド建設や殷の青銅器文化、ハンムラビ王による統一などは、いずれも日本の弥生時代よりさらに数千年から千年以上前の出来事です。
問6	答え 1 一人の女性を王として共立し、国をまとめさせた	当時の倭（日本）では、小国同士が激しく争う「倭国大乱」と呼ばれる時期がありました。この混乱を収拾するため、複数の小国が連合し、まじないや宗教的な権威を持つ卑弥呼を女王として立てることで国内の安定を図ったことが『魏志倭人伝』に記されています。
問7	答え 1 倭国	中国の歴史書では、当時の日本列島やそこに住む人々を「倭」と呼び、その国々を指して「倭国」と表現しました。卑弥呼が都を置いた具体的な場所は「邪馬台国」と記されていますが、日本列島の勢力を総称する当時の呼び名としては「倭国」が用いられています。
問8	答え 1 鉄器は鋭さや硬さを活かして農具や武器などの実用に供され、青銅器は主に祭りの道具として使われた	鉄は青銅よりも硬くて丈夫であるため、木製農具の先を補強する工具や、鋭利な刃物としての武器といった実用的な道具に用いられました。一方で、青銅器は独特の光沢を持つことから権威の象徴や祭りにおける神聖な道具としての性格を強め、鉄器と青銅器で「実用」と「儀礼」という役割の分担がなされました。
問9	答え 3 邪馬台国の卑弥呼が使いを送り、死後には大きな塚が作られて100人余りの人々が殉葬されたとする記述	『魏志』倭人伝は、邪馬台国の政治体制や女王卑弥呼の死、そしてその後の大規模な埋葬儀礼について具体的に伝えています。他の選択肢について、100余りの国に分かれていたとするのは紀元前1世紀頃の「漢書」地理志、金印の授与や倭国の乱れ（倭国大乱）は1世紀から2世紀頃の様子を記した「後漢書」東夷伝、天子を自称したのは7世紀初頭の「隋書」倭国伝の記述です。
問10	答え 1 高床倉庫	弥生時代には大陸から伝わった稲作が東日本を含む日本各地に広まり、食料を保存する必要が生じました。高床倉庫は、床を高くすることで風通しを良くして湿気を防ぎ、コメが腐るのを防ぐとともに、柱の途中に板を取り付けることでネズミなどの害獣が侵入するのを防ぐ仕組みを持っていました。
問11	答え 1 豊作などを祈るための祭りの道具	銅鐸は、弥生時代に青銅鏡や青銅器などとともに大陸から伝えられた青銅器の一種です。当初は音を鳴らすための実用的な鈴としての側面もありましたが、日本で発展するにつれて大型化し、集落の共同体で豊作を祈るなどの祭祀（まつり）に使用される宝器としての役割が強まりました。
問12	答え 1 邪馬台国 — 卑弥呼	2世紀後半から続いた倭国の大きな戦乱を収めるため、複数の小国の王たちによって卑弥呼が女王として擁立されました。この連合勢力が邪馬台国です。1世紀に後漢へ使者を送り「漢委奴国王」の金印を授かったのは奴国（なこく）の王であり、卑弥呼とは時代や状況が異なります。
問13	答え 1 稲作の開始によって収穫した食料を蓄えるようになったため、その貯蔵分を害獣から保護する必要があったから。	弥生時代の大きな特徴は、本格的な稲作の開始により食料の「貯蔵」が可能になったことです。蓄えられた米は人々の命をつなぐ重要な資源であり、これをネズミなどの害獣に食い荒らされることは、集落の存続に関わる重大な問題でした。そのため、物理的に侵入を遮断する「ネズミ返し」という構造が必要とされました。このような食料の蓄積は、後の貧富の差や身分の違い、集落同士の争いにもつながっていきます。